

# 政策評価制度に関する意見

京都市政策評価委員会

令和2年4月



## はじめに

京都市の政策評価制度は、「京都市基本計画」に掲げられた政策・施策を評価対象に平成16年度から実施され、客観指標評価と市民生活実感評価の2つの手法を用いた評価を行うなど、全国的に見ても先進的で特徴的な制度である。

本格実施から15年が経過し、制度の改善・向上が積み重ねられてきた結果、相当完成度の高いものとなってきたが、市民の理解や協力のもと、制度が適切に運用され、評価結果が有効に活用されることが何より重要である。

本委員会における制度の更なる充実、改善に向けた議論を踏まえ、京都市におかれは、以下の事項について、より一層の制度充実に努められたい。

また、政策評価制度の基礎となる現行の京都市基本計画の計画期間が令和2年度で終了することから、次期京都市基本計画に対応した政策評価制度について、以下で示すような視点を考慮して検討を進められたい。

### 政策評価制度の改善の方向について

#### (1) より適切な客観指標の確保

実態とかけ離れた目標値が設定されている場合は、目標設定の妥当性を検証し、適切な目標値となるよう検討を行う必要がある。

#### (2) 市民生活実感調査の充実

インターネットモニター調査については、行政が実施する調査においても採用されている事例が増えてきたが、統計的な有意性があるかなどといった課題もあるため、引き続き研究していく必要がある。

### 「次期京都市基本計画」に対応した政策評価制度

次期京都市基本計画は京プランの構成を継承することから、次期京都市基本計画における政策評価制度においても「基本計画の体系（政策－施策）に基づき、政策・施策のそれぞれを評価」、「『客観指標評価』と『市民生活実感評価』の2つによる評価」といった現行の大きな枠組みは継承するが、平成30年度の「政策評価制度に関する意見」で示したとおり、「市民によって分かりやすいか、担当部署による政策の企画・立案に役立つか、持続可能で効率的な運用が可能か」といった視点で改善を行う必要がある。

## (1) 市民にとってより分かりやすい評価結果，評価結果の活用について

- ① 従来どおりすべての項目を掲載した資料と，そこから要点を抜粋し分かりやすく取りまとめたポイント版の2種類を作成する。
- ② 文章で記載する項目は市民が読みやすい文字数へ削減するとともに，ポイント版ではグラフ等も活用し，内容を直感的に把握しやすくする。
- ③ ポイント版は，評価プロセスが理解しやすいようレイアウトを工夫する。
- ④ ①のうちすべての項目を掲載した資料については，全政策・全施策を一覧で見ることができる分かりやすいリスト形式とし，オープンデータとしても活用しやすくする。

この際，職員に新たな事務負担が発生しないよう，従来の評価票に加えてリストを作成するのではなく，各担当課における評価の段階からリスト形式により評価を行う。

- ⑤ 関連する情報を参照しやすくなるような工夫を検討する。

## (2) 市民生活実感調査の改善について

### ① 調査票レイアウトの改善

- ・ 調査の趣旨を直感的に理解していただくため，調査票の表題はより大きく分かりやすくする。
- ・ やさしい日本語やユニバーサルデザインフォントを使用し，より読みやすい調査票となるよう工夫する。
- ・ 回答者に慣れていただくため，調査票の最初の方には市政関心度や幸福実感など回答しやすい設問を配置する。
- ・ どの程度まで回答が終わっているのかが把握できるよう，各設問項目が全体に占める割合を示す。
- ・ 市民実感は設問数が多いため，設問のまとまりごとに区切る等，回答者の負担感を減らせるよう工夫する。
- ・ 政策重要度の設問は，全27政策を俯瞰したうえで回答できるようなレイアウトとする。

## ② 設問の改善

- ・ 現行の設問作成時の基本的な考え方（「平成 22 年度 政策評価制度に関する意見」）を基本的に踏襲し、下記の考え方に基づいて次期京都市基本計画下における市民生活実感調査の設問を検討する。

「市民生活実感調査の設問の作成に関する基本的な考え方」

ア 「みんなでめざす 2025 年の姿」一つにつき 1 問作成する

イ 回答者が第三者的な視点で直感的に判断できる形式に統一する。

ウ 難解な単語や、回答者が判断に迷うような記載を避けるなど、分かりやすい表現にする。

エ 語尾は基本的には「～である。」「～している。」、近年注目され始めた、又は現状改善を目的とする場合は「～になってきている。」とする。

オ 「京都」の使用は、京都らしさを直感的にイメージしやすい分野や、区域を限定した方が京都での生活実感としてイメージしやすい場合に限ることとする。すべて京都市民の生活実感であるため。

カ 「誰もが」「あらゆる」「ひとりひとりが」など、100 パーセントの達成を求める表現はしない。